

3. 統合失調症患者の長期療養における身体的変化：後方視的研究

鈴鹿厚生病院 薬剤部 谷口靖樹

目的) 統合失調症例は薬剤性食欲増進作用や不適切な生活習慣から肥満症を呈する。彼らは長期療養における規則的な生活により身体的変化を示す。そこで統合失調症例の身体的変化について調査した。対象) 2014年10月X日入院していた統合失調症例のうち毎年、身体計測の記録がある60例を抽出し身体的指標BMIの変化を観たところ4年経過時点で平均BMIが22まで減少した結果より4年以上入院している80例を解析対象例とした。

方法) 主要評価項目は行動制限が必要な閉鎖群42例と不要な開放群38例に分け入院時と2013年(長期:中央値10.2年)、2013年と2014年(短期)のBMI、同時にALB値・TC値・血糖値の変化(入院時・2014年)を検討。副次評価項目は各群においてBMI22前後に分け同様にBMIの推移(入院時・2013年・2014年)を検討。

結果) 平均BMIは閉鎖群(BMI:25.1.21.4.21.4)開放群(BMI:25.2.23.34.23.8)SD略P<0.01。TC値・血糖値は有意に低下。副次評価項目の両群各々のBMI22前後における平均BMIは両群ともBMI22以上群が有意に減少。一方22未満群は変化なし。

結語) 入院時つまり外来管理下では肥満であり、薬剤性食欲増進は継続されているにも関わらず入院を機に規則正しい生活を強制することにより標準的な体型へと変化する。同時に栄養代謝動態へ好影響を与えた。ただし退院後リバウンドの可能性は否定できない。